

体育会 × 応援団

絆対談



平成 28 年度体育会本部長
川原好恵

法学部・2013年入学 箕面自由学園高
体育会バレーボール部女子

関西大学応援団第 94 代団長
竹内美沙保

法学部・2013年入学 関大一高
応援団リーダー部

——応援団長、体育会本部長がともに女性というのは関大史上初めてです！就任されてどう感じますか？

竹内 最初はリーダー部初の女子部員というだけで目立つし、実力以外で注目されるのが嫌でした。だから髪も短く切りました。でも、今はそれをいかに使って関大を盛り上げられるか、一体感を作れるかを考えています。もっと自分から発信していかないと焦っているのが半分、楽しみなのが半分です。

川原 私が本部長になって描く体育会は「本気の KAISERS」。本気で取り組んだ先に結果を出して終わりじゃなくて、お互いが喜び合ったり、励まし合ったりする一体感を作りたい。団長と同じで「初の女性本部長」の私にしかできないことがあると思っています。

竹内 スポーツが盛り上がると体育会に所属していない学生もわかりやすい。「今年〇〇部優勝したんか！」って。だから体育会とは一緒に盛り上げていきたいです。

川原 体育会だけで盛り上がるのではなくて、体育会がフロントランナーとなって関大全体を盛り上げたい。それを体現できるのが総合関関戦だと思う。応援団が考えていることは似ているので、タッグを組んで 130 周年の新しい伝統を作りたいですね。

——体育会から見た応援団、応援団から見た体育会はどんな存在ですか？

川原 なくてはならない存在。「NO 応援団、NO 体育会」って感じます。

竹内 その逆だね。「NO 体育会、NO 応援団」(笑)。互いになくなくてはならないという意味では、「車の両輪」ってよく言われます。

川原 体育会の思いとしては、応援団に恩返ししたい。結果を出すことはもちろん、もっと集客にも力を入れて、大勢のお客さんがいる中で応援させてあげたいです。

竹内 お客さんの数で応援のスタイルも変わってきます。体育会を後押しするスタンドやベンチを作るには、どれだけお客さんを巻き込めるかが重要なんです。それから、応援団としては「結果」もうれしいけど、「結果」を勝ち取った選手の姿が一番うれしいんです。

川原 バレー部の応援にもよく来てくれるのですが、応援団がいる時といない時では全然違います。応援団は苦しい時に響く声を出してくれる。流れに乗ってるときに盛り上げてくれるだけじゃなくて、一番つらいときに寄り添ってくれる。そういう応援団がいることは本当に心強いですね。だから、「応援団のためにも勝たないと」という使命感が私たちのモチベーションにもつながっています。

竹内 応援団の練習って、いい時を想定することはないんです。常に負けている場面や苦しい場面を想定して、その中でいかに声が出せるかを意識しています。それが伝わっているのはうれしいですね。

——これまでで印象に残っている応援はありますか？

川原 昨年のバレーの総合関関戦。あんなに応援されたことは今までになかったの、本部員としてもバレー部員としてもうれしかった。

竹内 確かにあれはすごかったね(笑)。会場は関学の体育館なのに、ホーム戦みたいな雰囲気でした。

川原 あの試合を経験してバレー部は変わりました。応援団への感謝や尊敬の気持ちが強くなったし、「もっと応援してもらえるチームになろう」と、見ている人を楽しませるプレーや普段のあるべき姿勢を考えるようになりました。

——今年は大学創立 130 周年の節目の年です。それぞれどんな思いを持って活動していきますか？

川原 どれだけ真剣に体育会に向き合っ、思いを行動に起こせるかが大切だと思います。体育会本部は各部の技術指導ができるわけではないのですが、各部に寄り添って何かの形で力になりたい。「本気の KAISERS」を貫いた先に、体育会員には結果を残してほしいし、人間的成長も得てほしい。最後には「体育会で良かった」と思わせたい。測れないものだからこそ本気で挑戦したいです！

竹内 今年の団方針は「友」。我々が目指す「友」は、志を一つにして心が通じる仲間です。そして、全学友の「友」であるのが応援団。「関大の体育会には関大の応援団がいるんだ！」って誇れる存在でありたいし、もっともっと刺激し合いながら発展していきたいです！



↑ 昨年の総合関関戦・バレーボール部女子の試合では大応援団が駆けつけ、大盛り上がりを見せた



取材：関大スポーツ編集局 吉見元太
商学部・2013年入学 刈谷北高